

法梅蓮の 教学講座発心教材 / 種種御振舞御書 解答例

〈2019年 5月度座談会 拝読御書 対応版〉

5月度の座談会で拝読する、『種種御振舞御書』の御文について、あとの問いに簡潔に答えなさい。

一、日蓮によりて日本国の有無はあるべし、譬へば宅に柱なければ・たまたず人に魂なければ死人なり、日蓮は日本の人の魂なり平左衛門既に日本の柱をたをしぬ、只今世乱れてそれともなく・ゆめの如くに妄語出来して、此の御一門どしうちして後には他国よりせめらるべし、例せば立正安国論に委しきが如し

〔御書全集919頁3行目〜6行目〕

二、本抄にうつして、説明しなさい。

本抄は建治2年(1276年)、日蓮大聖人が55歳の御時、身延で認められ、光日尼に与えられたとされているが、詳細は不明。本抄ではまず、「立正安国論」で予言した、「他國侵逼難」「他国からの侵略が、現実のものとなってきた」といふことを述べらる。そして、文永8年(1271年)9月、平左衛門尉頼綱が兵を率いて大聖人を捕縛し、竜の口で斬首に及び竜の口の法難が果たせず、佐渡流罪に処する。続いて、佐渡での鬭争に筆を進められ、「自界叛逆難」の予言が的中した「二月騒動」(北条時輔の乱)、そして「開目抄」(御述作の経緯を示される。文永11年、佐渡流罪から赦免され、鎌倉に戻られた際、三度目の諫暁に臨まれ、同年5月に身延に入山されるまでを綴られておられる。)(大白57頁)

二、本抄の一説である「日蓮悦んで云く本より存知の旨なり」(御書910頁)を、具体的に説明しなさい。

この一節こそ、いかなる迫害の嵐をも見下ろしていかへ、大聖人の大境涯を象徴しておられる。それは、妙法蓮華經の五字を末法に弘める者は、必ず迫害されるとの経文を、身で読み喜びながら、『いれい』とまで言い切られたのである。(大白60頁)

三、傍線を具体的に説明しなさい。

五濁悪世の末法にあつて、大聖人がいらつしやらなければ、一切衆生の成仏の道は、閉ざされてしまうことになる。ゆえに、民衆を幸福に導き、国土に安穩をもたらすために、不惜身命で妙法を弘通する大聖人こそ、「日本の人の魂」「日本の柱」であることは、法華經の經文に照らして間違いないのである。『私が万人成仏の道を開くのだ』との大慈悲心から発せられた、主体者として立つ覚悟を示されている。(大白60頁)

四、傍線を具体的に説明しなさい。

「立正安国論」で予言した、「他國侵逼難」「自界叛逆難」が現実のものとなる。大聖人は、予言が的中することを、望まれていた訳では決してないのであつて、どこまでも、国土の安穩と民衆の幸福を願われていた。予言といつても、何かのお告げなどといった、神秘的なものでは全くなく、社会の根本原理の誤り、人々の精神の荒廃が、おまひまな現象となつて表れることを知っているがゆえに、それを防ごうとされたのである。だからこそ、「立正安国論」を著し、内外の戦乱と国土の災難を、事前「押」といふため、時の権力者を諫暁したのだが、幕府は、この諫言を用いず、竜の口の法難、佐渡流罪などの弾圧を加えたのである。(大白61頁)

五、この御文について、池田先生はどのようなことを語っておられるかを答えなさい。

黙していは、大善を為し得ない。臆さず、自分らしく、自信満々と声を響かせていくのだ。民衆の眞実の声、確信の声が轟々と響くから、必ず「立正安国」の夜明けが開かれるのである。(中略)(常勝の春の曲を奏でながら、勇氣と希望の対話の花々を爛漫と咲かせゆけい!) (大白61頁)